Peewee　年下草食甘男子

斉河 燈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｅｅｗｅｅ　年下草食甘男子

【Ｎコード】
Ｎ００２９Ｋ

【作者名】
斉河　燈

【あらすじ】
デザイン事務所代表・小野原惟（おのはらゆい）。長年部下だった気弱男子・杏に突然――。強い女のユルいサクセス＆ラブストーリー。（サイト掲載小説の加筆修正版）＊完結しました。番外編を公開するかもしれないので、完結ボタンはまだ。＊アルファポリス様より書籍化予定のため、８話以降削除致しました。書籍タイトルは『恋するデザイン』になりますのでご注意下さい。

1．年上肉食女社長

母性保護論争、なんてものが始まったのは百年ほど前のことらしい。歴史や思想に疎いあたしは、ぶっちゃけ詳しい内容までは把握していない。

しかし、与謝野晶子だったか平塚らいてうだったか、今ではお歴々とでも言うべき方々が女性の社会的地位向上のために議論した時代があったのだ――――と、失礼ながらすこぶる曖昧に記憶している。

それから時は流れ流れて、平成の世、日本。

現代社会における女の生き様とはいかなるものかと問われたならば……あたしは、“戦々恐々”とでも言ってやりたい。

世の中、恐ろしいことばかりなのだ。

「あのう先生、ランチ、どうしますか」

事務所として間借りしている雑居ビルの一角、缶詰になっていた部屋がそろりと開封され、気弱な質問がひとつ投げ込まれる。ついに、ついに外の世界へと、あたしの秘密が流れ出してしまったのだと思った。

朝から華麗に『考える人』ポーズを決め続けるというギネスへの挑戦――ではもちろんなくて、デスクを前に頭を抱えたきりさっぱり仕事を進めた形跡がない、という秘密が。

「いらない」

後ろめたい気持ちもあって、あたしはそのままの格好で答える。
スチール製の扉は年季もので、ふたつの蝶番はそろってきいきい悲鳴のような音を立てる。歯の根がゆるむというか、背筋を毛虫が這うというか、とにかく体中の不快感という不快感を余すところなく呼び覚ましてくれる音だ。

「……いくら締め切りだからって、何か食べないと倒れますよぅ」

声の方角に視軸だけを移動させると、心配そうに眉尻を下げる子ウサギちゃんが一匹、垣間見えた。ウサギちゃん、というのはもちろん例えであって今ここがメルヘン世界、というわけではない。
現在地は都内某所。
そしてここは小野原デザイン事務所の本拠地――つまりあたし、小野原惟（おのはら・ゆい）ちなみに二十九歳――が代表を務めるオフィスの一室なのである。
ついでに小ウサギちゃんの正体は水元杳（みずもと・よう）という。三つ年下の部下で、外見はどこからどう見ても可憐な少女でしかないのだけれど、一応は男だ。
もちろん確かめたことはない。うっかり握ってみようかなあとは思わないこともないけれど。

「昨日もウィダーインしかとってないし、僕、心配で心配で」
「うるっさい、仕事部屋には来るなと何度も言ってるでしょうが！」

ぐずぐずと鼻声でいかにも健気そうに訴えかけてくるものだから、あたしは耐えかねて鷲のマークの茶色い空き瓶を放った。ちなみにこれが朝からのマイ摂取カロリーの大半である。

「暇ならとっとと働きなさい！」
「ひいっ」

しっしっと追い払って足先でドアを閉める。そうしてあたしは真っ白なクロッキーブックを前に、ひとり馬鹿でかいため息を零すのだった。

あと二十四時間で期日がやってくる。

もう、プレゼンに間に合うかどうかという瀬戸際だ。それこそランチなんて悠長に食べている場合じゃあない。

かのレイモンド・ローウィ（たばこのピースやコーラの自販機をデザインした人ね）に憧れてこの道を志したあたしは、巷に出回る工業製品を手がけている。そう、デザインというとファッションだと思われがちだけれど、あたしの専門はプロダクトデザインなのだ。

今はまだ仕事が選べる状況ではないから、お菓子のパッケージやらチラシやら、家具家電の類いまで、ありとあらゆるものを請け負ってはいるけれど。

華やかに見えて厳しい世界だ。とはいえ女だからと言ってナメられたくはないし、妥協をしたら終わりだと思う——なんて、理想を語っていたらすでに三十路は目前。

これはいわゆる崖っぷちってやつだ。一応、自覚はしている。ここ数年に至っては彼氏もいないしデートの予定だって皆無なのだから。

でも、言い訳をするわけではないけれど、この事務所を立ち上げてからあたしにとってなにより大切なのは、目先の締め切りと部下の生活。顔も分からない未来の旦那さまよりよっぽど現実的だし、ずっと切実だと思う。

てなわけで最近実感しているのは、夢を追うのはある程度若いう

ちでなければできないのに、女にとってその期間はあまりにも短いということ。
不公平だ。男に生まれたかった。恨むよお母さん。ついでに言わせてもらえるなら、お見合い写真を送って来るの、いい加減やめてよ。いえ、やめていただけますか。やめていただけたら助かります。

「うううう」

腹の奥底から声を絞り出し、頭を抱える。こんな姿、誰かに見られようものなら１１９番、救急隊が駆けつけること必至だ。
今回の依頼はというと、小さなペットボトル飲料のパッケージ。コンセプトは「健康」で、クライアントによるとセールスポイントは特許を取得したばかりの製法らしい。
どれだけ努力を積み重ねて出来上がったものなのか、研究室の方の熱弁でずっしり受け止めたばかりだ。失敗に失敗を重ね、開発に五年の歳月を要したとか。
だからあたしはそれを上手に消費者に伝えなければならない。いわばメッセンジャーの役割だ。

それが、デザイナーの仕事。
でも、考えれば考えるほど迷う。

いつだってこうだ。自信なんて毎回ない。こんな自分が、先生、だなんて、笑える話だ。
ちょこっと雑誌に取り上げられて、ちょこっと名前が売れただけ。中身がご立派になったわけではないのに。
ふと背もたれに寄り掛かると、すりガラスの窓越しに真っ赤な夕日が見えた。
アイデア待ちで日が暮れた時の絶望感ったらない。死にたくなる。
気付けばニットは毛玉だらけだし、部屋から出ないからって日が

なノーメイク。髪は伸び放題だし、ああ、前回美容室に行ったのはいつのことだっただろう。
スパイラルで落ち込んで、頭も真っ白。
きれいさっぱりだ。

「……もう終わりだ。あたしの想像力、死んだ……」

でもってこんな独り言ばかり言ってしまうあたしは、女としても終わっている。誰か、ミイラにでもしてやってちょうだい。
デスクの上で紙を千切りはじめた途端（飽きるとついやっちゃうクセ）、ドアがかちゃりと開いて潤んだ瞳がそこから覗いた。

「先生、死んじゃいやですよう」
「おまえはストーカーか、杳」

彼はもともと同じデザイン事務所で働いていて、あたしが独立すると言ったらくっついてきた奇特な人間だ。
ふわふわっとした空気感のある天然パーマの髪は栗色で、大きな目はくっきりとした二重と長いまつげに飾られている。まるで、ルーベンスの描く天使のごとき容貌なのだ。
あたしが本気を出してエステに通ったとしたって、絶対にあんなふうにはならない。
身長も百六十センチと小柄だし、男とは思えないほど繊細で、思いやりがあって気遣いが出来て、同僚の女の子に受けがいい。
要するにあたしとは正反対のヤマトナデシコな男、それが杳なのだ。
と、杳の背後から子ウサギちゃんその2――アシスタントの女子がいう。

「先生、杳ったら先生がご飯食べるまで食べないって断食してるん

ですよ」
「はあ？」
なんて無駄な。呆れてそれ以上ものが言えなくなったあたしの前、杳は青くなって彼女を振り返り、ひどいよ、と泣きそうな声で訴えた。
「内緒にするって約束したじゃないかあっ」
おまえらは女子高生か。ついついおばさん目線で冷ややかに見てしまう。と、彼はぷりぷりと怒った後、再びあたしに向き直った。
「そうだ、あの、先生これ」
目の前に差し出されたのはあたし愛用のデザートプレートだった。そこには丸くてこんがりきつね色の物体がこんもりと盛られている。
「む、何」
むせ返るほど甘い、バニラの匂い。その向こうで杳はほわほわっと柔らかく笑う。思わずふにゃふにゃっと情けなく笑い返しそうになった。
「ドーナツです。休憩時間に揚げたんですけど、いかがですか」
「揚げた、って、杳が？」
「ハイ。ホットケーキミックスがあったので」
ああ、そう言えば。
ホットケーキが無性に食べたくなって買ったものの完全放置プレイで賞味期限が切れそうだったアレか。

「先生、甘いものお嫌いでしたっけ」
「いや、そうじゃないけど」
甘い味の揚げ物というのが苦手というか、締め切り前は胃がキリキリするというか――でも。
「お邪魔なら片付けますよ」
「ううん、もらうわ」
作ってもらったものを、食べないわけにはいかない。
「ありがとうございますっ」
お礼を言わなければならないのはあたしのほうなのに、そういって頭を下げたのは杏だった。
「やっぱり先生はやさしいですね」
綿あめみたいなほほえみ。あたしには到底出来ない表情だ。
「やさしい？　あたしが」
「はい。やさしいですよ。だって、先生は誰かが作ったものを絶対に無駄にはしないですもん。お仕事の時も、そうじゃない時も」
「そりゃ、自分も作り手の端くれとして」
「僕、先生のそういうとこ大好きです」
「そ、ありがと」
砂糖まみれのそれをひとつ頬張ると、やさしくて懐かしい味がした。そういえばこういうの、実家を出て以来食べていないっけ。気

持ちがすこし、ほどけた気になる。

「うん、美味い」

頬を緩めたあたしを前に、嬉しそうに目を細める杳。

「よかったあ。じゃあ、明日からランチも出前じゃなくて僕が作りますね。夕飯も、お夜食も」

「なんで」

「そうしたら先生、食べないわけにいかないでしょ」

痛いところをつかれて焦ってしまう。

「そ、そりゃありがたいけど、杳だってデザインがやりたくてこの仕事やってるんだよね？　毎食メシ番だなんて面倒なこと」

「面倒だなんてとんでもない。僕、料理好きですし」

「まあ、男だって料理が出来るほうがモテる昨今だけどさ」

「なら任せてもらえませんか、先生の食事」

杳の必殺技・きらきら真剣まなざし攻撃にうっかり一撃でＫＯされそうになって、あたしは顔を背ける。

「気持ちは有難いんだけど、これ以上甘やかされると……あたし女としてヤバいもの」

「ヤバくなんてないです！　先生はいつだって凛々しくて、仕事に一生懸命で、格好よくて、みんなの憧れですから」

「……そうかなあ」

むずがゆい。褒められて悪い気はしないけれど、素直に喜ぶことはできない。

杳はいつも女の子に対してこうなのだろうか。優しすぎていつか損をするよ、なんて勝手なことを思った。
すると、彼は珍しく自信満々の顔で
「だから余計なことは心配せずに、先生は思いっきり仕事に打ち込んでいて良いんです」
そんなことを言い、自ら率先して納得してみせるみたいに頷いた。
「そう、……？」
衝撃だった。そんなことを言われたのは初めてだ。
両親にはいつだって「仕事は一生のパートナーじゃない」「仕事と結婚するのか」なんて叱責されるばかりだったから。
思いっきり打ち込んでいい、なんて、ああ、なんだか泣きそう。
「そうですよ。くれぐれも、無理は禁物ですけど」
杳はやはり優しくにっこり笑って、部屋を出て行った。
温かくて甘いドーナツを平らげて、あたしはふんと鼻息を吐く。
糖分を補給したお陰か、休憩を入れたお陰か、その後仕事がはかどったことは言うまでもない。ご飯はやはり、きちんと三食、食べなければと反省した次第。
「お疲れさまです、ランチ、出来ましたよお！」
杳はというと、翌日から早速マイエプロンを持参し、腕をふるってくれた。十六雑穀のご飯や煮しめなど、ヘルシーな料理は有難い限りだ。その腕はさることながら、女心を熟知していることにも感心してしまう。

「んー、今日も最高っ」

こうして、アシスタントの女の子たちとランチタイムにしあわせを噛みしめる日々が始まった。

（あー、杏みたいな嫁が欲しい）

そう頭の中で呟いたあたしにおかわりを差し出しながら、彼は得意の綿あめスマイル。そして言った。

「僕以外の男性社員、採用したらダメですよ」

「どうして」

「この先もずっと、先生のご飯を作る男は僕だけですからね」

……ん？

2．うっかりキスの効能

Q：部下に手を出そうとしている（むしろ出した）フトドキモノはどこの誰でしょう。
A：小野原の惟とかいう女、つまりそれはあたしです。

「はあ」

二十九歳独身、あたしは今、人生の岐路に立たされている。
一方は婚活、つまり結婚コース。つまり仕事はほどほどに、旦那さまを支えて生きていく堅実な人生だ。
もう一方は仕事一筋生涯独身コースで、親が煩いのを我慢すれば、悠々自適な自分の時間を楽しめる人生。
しかしながらその両方に背を向けて、人の道を外れようとしている自分がここにいる。
アカン、アカンて――脳内ナニワのオバチャンAが言う――アンタの人生、間違うとるよ。ロクな死に方せえへんで！　やめとき！
部下の男をつかまえて、一生下働きさせようだなんて！

「うわあすみません、大遅刻ですう。待ちました？　服、選ぶのに手間取っちゃって」

公園のベンチに駆け寄ってくる杏は、タイトなパンツにゆるっとしたニットパーカーを羽織っていて、若々しいカジュアルルックだった。いつもの通勤服より幾分動きやすそうに見える。
加えて、マルーンカラーのふわふわヘアとわたあめより糖度の高そうな笑顔は今日も健在だ。

「い、いや別に待っちゃいないけど、き、今日もかわいいね杳……」
「ありがとうございます。先生こそワンピース、似合ってます。今日のオシャレ、僕のためですよね？」
「そ、そ、そん……」

すぐ前で護摩でも焚いているかのように顔全体が熱くなる。本当に焚いているのならこの煩悩を滅して頂きたいところなのだけれど。
思わず背を向けて早足で進むあたしは中学生日記もまっさおの純情ぶりだった。
否定しようとしてもしきれない。そうだ、あたしは今、杳を完全に異性として意識しているのだ。
昨日の朝まではかわいい妹、いや弟くらいにしか思っていなかったのに、……キスってものは凄い。たかが接触、されど接触、だ。単なる皮膚なのにどうしてだ。
つい反芻するように唇を撫でて、ますます緊張が高まって、普通の表情の作り方がすっかりわからなくなった。

＊　＊　＊

事の起こりは、数十時間前。

「あー、最近キスしてないなあ」

いっちゃんがそんなことを言い出したのは、ランチの真っ最中だった。ちなみにメニューはおからのコロッケとキャベツの千切り、しじみのみそ汁、玄米ご飯におしんこで、もちろん杳のお手製だ。

「軽く干物ですよ。先生は恋ってしてます？」

あたしより三つも若い子がいう台詞じゃあない。

いっちゃんは本名を本宮いつかといい、地味だけれど可愛い、花に例えるならポピーみたいな女の子だ。ファッションはツインニットと膝丈スカートが定番で、ミニ丈のものを履いているところはほとんど見ない。

「あのね、そんな暇があるように見える？　第一、いっちゃんが干物ならあたしなんて化石よ化石。博物館に寄贈してやるっ」
「そんなあ。あ、メーカーの三木さんはどうです？　この間デートに行ってたじゃないですか」
「あれは単なる接待。あたし、ああいうスーツがピチーッとしたスカした野郎は好きじゃないし」
「うわ、厳しい先生」

思えばこの時、あたしは杳が男だということをすっかり失念していた。いや、それを言うならキスの話題なんてふってくるいっちゃんこそ、確実にそのことを忘れていたのだと思うけれど。
その杳はというとテーブルの隅で、居心地悪そうに玄米ご飯をもそもそ咀嚼していた。

「じゃあ先生の好みって？　どんなひととなら結婚したいって思えます？」
「……便利な男。あたしに主婦業を押し付けないような、忙しくても文句を言わないような」
「それって杳じゃないですか」

いや、だいぶ違うような気もするけど。
あたしが言いたいのは、例えば一緒にいて『仕事と俺、どっちが大事なんだよ』とか言わない男で、デート中に仕事のことを考えていてもそっとしておいてくれる男で、記念日を忘れても電話をしばらくかけなくても、温かく見守ってくれる懐深き大器な男なのだ。

あちらも同じように仕事で忙しければ尚良いと思う。痛みを分かち合えるし相互理解がしやすいから。
……とはいえ、去年の男はその忙しさが理由で別れたんだっけ。
「せっかくふたりともフリーなんだし、一回くらい仕事抜きでデートでもしてみたらどうです」
「いっちゃん、あのね」

杳はまずかろう杳は。
だってどう考えたって、あたしと杳じゃデコボコだし。
使い走りにするのはいいとして、手を出したら逆セクハラでめでたく犯罪者の仲間入りができそうだもの。

「ちょうど今日の納期の後、連休ですし。ね。杳もそう思うでしょ」
「え、えと、僕は、先生さえ良ければ」
「はい、決まりですよ先生っ」
「……待てこら」

半目でつっこんだものの、仕事が押していたからそれ以上話している暇はなくて、はっきり断ることは出来なかった。
しかしあたしは中止にする気、満々だった。だってあの状況じゃ、杳は断りたくても断れなかっただろうから。
そこで仕事終わりに彼を缶詰部屋に呼び出すことにした。いっちゃんに知られぬよう、こっそりとPCにメールを送って。

「あのさ杳、明日のことなんだけど」

お休みの日くらいは上司の顔を忘れてゆっくりしなよ。と言いたかったのに、彼の行動は驚くほど早かった。

「お店なら、インターネットで予約しておきました。最近出来たばかりの有機野菜のレストラン、すっごく美味しいんですよ。待ち合わせ場所はそこの公園でいいですか？」
「はいっ！？」
「じゃあ決まりですね」

このときのあたしを写真に撮ったら、両目がぽつりと見事な点になっていたと思う。

「嬉しいな。夢みたいです。きっと通じないだろうなって思ってたから」
「な、なにが」
「僕が先生を好きってこと」

さらっと告白されて、今度はその点になったままの目玉が飛び出そうになる。よ、杳があたしを、すき？　うそでしょ。
いや、でもそういえば何度か、大好きとかなんとか、言われた気がしないでもない。そんなことを思い出したら、むしろ自分の鈍感さに度肝を抜かれた。
いつからだ。なんでだ。こんな女に、どうしてだ。

「初めて会った日から、ずっと憧れてたんです。有能なのに気取ったところはなくて、気さくで優しくて、素敵な人だなって。だから、だから、」

感極まったのか、彼はつぶらな両瞳に涙をたっぷり浮かべる。効果音を添えるなら『うるうる』である。

「デート、できるだけで僕、うれしくて……」
「よ、杳」

「こんなの奇跡です。あ、りがと……ございます」

このくらいで感謝されてもなあ。

健気すぎる彼を見ていると、どうにも後ろめたくなってくる。自分が世間擦れしすぎているせいだろうか。だとしたら、せめて杏にはこのまま無垢でいて欲しいものだわ。

あたしは姉気分で、その頭をヨシヨシ、と撫でた。空気感のあるくせ毛はなんとも言えない手触りで、やはり子ウサギを彷彿とさせてくれる。外見も感触も可愛いなんて、なんとも罪な男だ。

「せんせ……」

「うん？　とりあえず泣くな」

まあ、デートくらいしてやってもいいか。その程度なら犯罪にはならなかろう。なんて同情半分で彼を覗き込めば、涙に濡れた瞳がぱっとこちらを見上げた。

ドキッとする。男というより、まるっきり少女の泣き顔をしていたからだ。え、何、この感覚。

そして、まさしく次の瞬間だった。隙をついて、杏がすこしの背伸びをしたのは。

「――――！」

接触する唇と唇。

驚いたあたしの首筋に腕を回し、杏は器用に角度を変える。直後割り込んで来た舌の感触に、あたしは声を上げそうになった。

（ん……っ、な、……なんだ、これは）

そう思ったのは、キスが久しぶりだったせいじゃない。

事実、彼のキスはとろけそうに甘くて、つまるところ、うっとりするほど上手かった、のだ。腰が抜けるかと思った。
就寝するころになって気付いた。そうだ、杳は手先が器用だったのだ。舌先まで器用だったなんて流石に予想は出来なかったけど。

あれほど繊細なキス、初めてかもしれない。
ガツガツした余裕のない男とは違う、気遣いのかたまりのような行為。

もう一度、してみたい、と言ったら変に思われるだろうか。欲求不満の年増が可愛い年下くんを弄ぶのはまずい、それはわかっている。
なのに、あんなキスをする杳ならそれ以上のこともきっと――、なんて妄想がとまらないあたしはもう、つける薬のない重篤患者なのかもしれなかった。

＊　＊　＊

そんなわけで、あたしは今困っている。
これはいわば、三つめの選択肢だ。女としての幸せも、仕事も、両方が手に入るかもしれないという奇跡の。
引き換えに、杳の人生を犠牲にすることはうけあいだけれど。
良いのだろうか、あたしの人生に巻き込んでしまって。

「あのですね、先生」
「な、なに」
「僕、便利な男でかまいませんから、これからも側に置いて下さいね」
迷うあたしの後押しをするように、杳は言った。

「先生のこと、一生支えるのが僕の夢なんです」

健気すぎる。

あたしみたいな女にはもったいない。そんなに優しいと本当に損するよ。

けど、そこまで言うなら……出しちゃうよ。出しちゃうからね、手。

「……‘先生’っての、やめない？」

「え？」

「恋人同士なら、‘惟’って呼んで」

ぱあっと目を輝かせる杳を見下ろし、あたしはとりあえずヒールの高さを下げるところからはじめようと思った。

3．スペシャル・オーダー・クリスマス

「わぁ、ついに発売されたんですね！」

杳は興奮を抑えきれない様子で女性向けファッション誌‘ノンノン’を捲る。

銀粉をはたいたかのようにきらきら輝くつぶらな瞳は、到底二十六の男のものだとは思えない。

そこに映っているのは、あたしがデザインを担当した腕時計の記事。

「感動です。こんなに大々的に紹介されるなんて！」

「いや、それはメーカーがタイアップ企画を持ち込んだからだよ」

つまり広告費やら何やらを払って付録まで付けたわけだから当然の扱いなのだ。

さらに巻頭での掲載が可能になったのは、あたしがたまたまそこの編集長と旧知の仲だったから。いわゆるコネってやつだ。パーティーには出席しておくに限る。めんどいけど。

「問い合わせが殺到してるってさっき、連絡が来ましたよ」

「そ、なら今日は安心して眠れるわ」

三日ぶりにね。

「ワインでもあけましょうか。僕、チーズ切ってきます」

「うん。みんなはどうする？　飲んでく？」

夕食のパスタ、最後のひとくちを頬張りながら見渡すと、何故だかみんな揃って呆れ顔。

「クリスマスイブに飲み会を催してどうするんですか。私かえります」

「邪魔者は消えますからふたりでごゆっくりー」

「え、や、ちょ、待て」

そんなつもりはなかったのに、アシスタントの女の子たちはあっという間に席を立ってしまった。去年はみんなで飲み明かしたのに、薄情ものめ。

とはいえ真の薄情者は、事務所唯一の男子をモノにしてしまったあたしなのだろうけど。

「帰っちゃいましたね」

「だねえ。杳は大丈夫なの？　予定とか」

「……それ、わざと言ってるなら意地悪すぎますよ、惟さん」

むっとする杳は少しだけ男の子の顔をしていて、そんな彼に名前で呼ばれると照れ隠しで無表情になってしまうあたしは世界屈指の意気地無しだ。

わかっていても耐えきれない。

だって、ずっと可愛い弟、むしろ妹みたいに思っていた杳が、あたしの恋人だなんて。

「ワイン、赤で良かったですか」

「うん。あ、そだ、美味しい生ハムがあるのよ。昨日文具メーカーの松田くんに貰ったんだけどね、スペインのなんとかいうやつ」

どこにしまっただろう、記憶にない。冷蔵庫内部だとは思うけれ

ど、常温で放置したとしたらすでに死亡確定だ。

「それなら冷凍しておきましたよ。松田さん、最近よく来ますよね」

唇を尖らせて不満そうにする杏を見て、あたしは咄嗟に口元を押さえる。

失敗した。別の男にモノを貰った話題なんてふるべきじゃあなかった。あたしの食い意地の大馬鹿野郎。

「そ、そうかなあ。仕事、受けたからでしょ。ご機嫌うかがいよ」

「昼時ばっかり狙って来る気がします。ランチに誘うために」

流石草食系と言うべきか、杏の観察眼はおなご級だったりする。要するに、神経が繊細に出来ているのだ。

実はこの間突然告白されたとか、言うべき？　こういうの、打ち明けておくべき？　でも、ショックを与えそうだしなあ。

「あのさ、杏」

「僕、松田さん、きらいです」

嫌い――ね。素直すぎる一言に、あたしは続く言葉を呑み込む。

と、たいして強くもないくせに、杏はワイングラスを一気にあけた。

「僕の惟さんに、べたべたさわるから、きらいです」

とろんとした半目で、ささやかな独占欲をのぞかせる彼は少年のようで可愛い。

対し、ちょっとやそっとのアルコールでは顔色が変わらないあたしは、なんて可愛くないのだろう。

「……なら、杳もさわればいいのに」

小さく言って、手酌をした。

付き合いだしてからしたことといえば、デートを一回とキスを数えるだけ。すでに三十路手前のあたしには勿体ぶって出し惜しみをするモノなんてないし、誘ってくれさえすれば受け入れようと思っているのに――。

「松田さん、カッコイイし、僕よりずっとお金持ちだし、せがたかいし」

「こら杳、悪酔いしてるよ」

「惟さんにも、にあうし……」

子供っぽいことをブツブツ言うのも可愛い、とあたしは思っているけれど、彼にとっては深刻みたいだ。

いっちゃんが言っていた。杳はあたしを満足させる自信がないから、なかなか先へ進めないでいるらしいと。

別にかまわないのだけれど。そんなの、最初から期待していないし気にするつもりもないのに。

とはいえそれをこちらから切り出すのは、一歩間違えば慰めになってしまうだろうから難しい。こんな外見でも一応は男なのだし。

……そうだなあ。

考えがないこともないあたしは、頭の中で唸る。うん、まあ、とりあえず。

「あのね、いっこだけ言わせてもらっていい？」

「……なんですカ」

「最近キレイだね、って言われたの、松田くんに」

「や、やっぱりぼくの惟さんに、手を出そーとし「最後まで聞け」

あたしは彼の頭を上からわしづかみにした。

「以前はそんなこと、言われなかったの。最近よ最近。だからね、正直に答えたわ。好きな人ができたからだ、って。杳と付き合いだしたこと、ちゃんと話したわよ」

彼の頼りない肩越し、ベランダの外には見事な夜景が広がっている。仕事場ってのはいただけないけれど、一応はロマンチックなシチュエーションよね。

「これあげる。クリスマスプレゼント」

テーブルの下に置いておいた紙袋を差し出す。シラフだったら恥ずかしすぎて鼻血噴射まちがいなしだ。

「世界にひとつしかない、例の時計の特注品」

製品は女性用で文字盤にピンクのラインストーンが施されているのだけれど、これは特別にクリスタルガラスの会社に頼み込んでデッドストックの淡いブラウンに付け替えてもらったのだ。

杳のイメージにぴったりだったから。

「ぼ、僕に……？」

「他に誰がいるの。あたしの男は杳だけでしょ」

「あ、ありがとうございますっ、大事にします……！」

反応がいちいち可愛くて困ってしまう。思わずきゅんとしてしまった。

するとふらふらと席を立った杳は馬鹿でかい包みを抱えて戻って

きた。

「これ、僕からです。だきまくらにでもしてください」

そういって赤ら顔で笑う。なんて健気なあたしのサンタクロース。

遠慮がちに包みを開くと、彼の髪に似た手触りの、長毛のテディベアが姿を現した。

こんな少女趣味なプレゼント、初めて貰ったかも。

しかし……だきまくら、ねえ。

「断る」

「ええっ、そんなぁ」

「うちのベッド、せまいもん」

言って最後の一杯を、決意とともに胃へと勢い良く流し込む。

「コイツと寝たら……、なくなるよ」

これまでこっちから誘わなかったのは、あたしが目上だからだ。

杳には断りようがないし、セクハラにもなりかねない。

でも今日は、今日だけは、特別よね。

「……杳が入る場所、なくなっちゃうよ。いいの？」

今夜だけは、アルコールのせいにしたって許されるはず。だって、聖夜だもの。

「え、あの、ゆっ、惟さ……」

「あたし、明日の朝ごはんは和食がいい。杳が焼いた鮭がたべたい」

「ほ、本気ですか」

「本気だから付き合ってるんだよ」

ああ恥ずかしい、やっぱり恥ずかしくて死にそう。あたし、本当は全然酔えていないのかも。

クマの爛々とした目が妙に気になって、リボンをそこに結び直した。見なくてよろしい。

「杳は本気じゃないの？」

「そ、そういうわけじゃ」

「じゃあ、あたしとするの嫌？」

焦ってかぶりを振った彼は、彼のワイングラスを持ち上げるあたしの手をとめる。

「……お酒の勢い、じゃ駄目です。惟さんのこと、ちゃんと、大切にしたいんです……」

大切に、なんて言われたのも、初めてかもしれなかった。つくづく、あたしは彼に驚かされてばかりだ。

「そ、それに、がっかりされたら困るし、僕、あんまりそういうの、慣れてないから――　ん」

照れる彼に短くキスをして、席を立つ。これ以上言い訳をされたら、フォローに困る。

「あたしはそのままの杳がいいの」

「で、でも」

「いいって言ってるんだからいいの。ね、酔いをさましながら帰りましょ」

ここまできたら急がば回れ、とか言ってられない。もう待てそうにない。だって、可愛すぎるんだもの。

「……はい」

こうして、あたしは珍しくケンタッキーのパーティーバーレルよりも大きなものを聖夜にお持ち帰りしたのだった。めでたし。

4．朝焼けの前に

イベントの翌朝なんて大嫌い――あたしはずっと、そう思ってた。

それは何もクリスマスに限った話ではない。単なる飲み会や忘年会やお祭りごと、少人数で過ごすパーティーも含め、あらゆるイベントに関して共通して言えること。

どこでどうハッスルしたのかあちこちの関節がみしみしいうし、二日酔いは免れないし、ごくまれに取引先の男が隣で寝ていたりするし……いや、それはまた別の話か。

とにかく、なんといっても、自分の浮かれぶりを思い出すにずばっと切腹したくなるのだ。

あの程度のことで呑んだくれて無礼講だとか騒ぐあたし、恥ずかしいったらありゃしない。

そして結果が目に見えているにもかかわらず、毎回毎回同じことを繰り返してしまう阿呆な脳細胞が憎い。

だからあたしは、後悔ばかりが残る翌朝なんて大っ嫌いだったのだ。

「って、思ってたんだけどな……」

またやってしまいましたよ。

薄暗闇のなか、ぽつりと呟いて狭いベッドで寝返りを打つ。携帯電話を開くと、『１２／２５　０３：１０』と表示されていた。

ああ、いつの間に寝てしまったのだろう。暖房が付けっぱなしだ。大きく伸びながらあくびをすると、不思議とアルコール臭さは感じなかった。

そこに柔らかい小動物が右肩にすり寄ってきて、あたしはふと重

要なことを思い出す。

（そうだ、杳。クリスマスにかこつけてお持ち帰りしちゃったんだっけ）

ぼんやりと浮かび上がる輪郭は、細い、というより淡い、と表現したくなるほどたよりない。目を凝らし、指の腹で撫でながら、彼であることを再確認する。

変な気分。

杳が、もう五年以上も単なる部下だと思っていた男が（いやむしろ男とすら思っていなかった生き物が）裸のまま、寄り添って眠っているなんて。

そっと、起こさぬように抱きしめると湯たんぽかと思うくらい温かかった。

夕べは照れ臭かったけど、なんというか、正直――驚いたというのが感想。

杳は脱いだらちゃんと筋肉質な男の体をしていたし、あたしにリードさせるなんて野暮なことはしなかったから。びっくりして、そう、見直したのかもしれない。なんだかんだ謙遜してばかりいるけど、彼は充分すぎるくらい立派な男なんだと思う。

すると、クゥクゥとかすかな吐息が耳元で響いた。

やだ、二十六の男が立てる寝息じゃないでしょ、それ。いまどき、子猫だってもっとデカイいびきをかいて寝る。しからば杳は、子猫以下の小動物ってことか。

「……ゆい、しゃ……ん……クゥ」

「ぶはっ」

鼻血を出さん勢いで噴き出してしまった。可愛い。可愛すぎて、三年先まで癒された気分だ。

こんなに可愛いフリーの男子がこの世にまだ生息していたなんて、かみさま有り難う。しっかり頂戴致しました。

独立してから恋愛なんて二の次で、せこせこ働いてはシングルライフを楽しんできたけれど、そこで培った価値観がちゃぶ台返しみたいに覆された気分。

この先恋人を作るなら自分より年収が上と決めていたし、利口でしたたかな男に限り、五分の関係でうまくやれるんじゃないか、なんて思っていたけれど。

はっきりいってそんな関係、あってもなくてもあたしには同じだったのかもしれない。対抗心で張り合いはするし便利だろうけど、きっと続かない。だって癒されないもの。

そうか、あたしに必要なのはかわいいお嫁さんだったわけね。納得。

「……杳。よーう、起きて」

もぞもぞ、かき分けたシーツの向こうで足を絡め、耳元で囁く。胸に手を乗せると、見た目よりしっかりした筋肉がそこにあった。案外腕力があるんだな、というのも夕べ発見したこと。

空が白んできた。美味しい朝食は近い。だけど、その前に。

「ぅむ……、ゆい、しゃん」

「……ねえ、今度はあたしが襲ってもいい？」

「んう……？」

かわいいお嫁さんをおかわり希望。

何度も抱き締めて、その柔らかい髪をめちゃくちゃに撫でるの。

そうしたら、きっと今までに見たことのないようなぴかぴかの朝

日がのぼるから。
クリスマスのイルミネーションより、ずっとずっと綺麗な朝がやってくるから。
そんな気がして、あたしはなんだか、朝がとても楽しみだった。

5．昔の男、つまり負の遺産

年末年始といえば、もちろん忘年会および新年会だろう。
大義名分を掲げてだらっと呑みまくる、素晴らしきかなニッポンの風習。翌朝後悔の塊と化すあたし、それでも呑まずにはいられない。別にうっぷんが溜まっているとか、ウサを晴らしたいとかではないのだけれど。
年明けから春までの期間には憂鬱なアレが待っているから、現実を忘れたいだけなのだ。
そう――他人まかせにしてばかりでもいられないアレ。この上なく面倒な作業にもかかわらずサッパリ儲からないアレ。

……確定申告！

独立したとはいえ、あたしの稼ぎではまだまだ個人事業主。従業員はいるけれど、アシスタントレベルの雇いぶりしかできていない。しっかりしなきゃとは思っているのだけれど、現実は厳しい。
去年の今ごろにも領収書をちゃんとまとめておくべきだったと散々後悔したはずなのに、溢れかえった書類箱を見て唖然となる。大した進歩がない自分に拍手喝采だ。

「よくまあここまで放置したもんだ、マンセー。格安で処理してやるからおまえも手伝え」

とは専門学校同期の名嘉史朗（なかしろう）、現在の表情をあらわす言葉は括弧苦笑、というより呆れ顔だ。

「おまえ未だに変人なんだな、学生時代から風来坊だったもんな」

「グラフィック科卒で税理士やってるアンタに言われたくないんだけど」
「年下のクセに生意気な」
「年増ってだけで偉そうに」

史郎は馬面でクックと笑ってくれる。久々に会ったけれど変わっていない。昔からこんな奴なのだ、こいつは。
ご立派にお大学を卒業したくせにデザインの専門学校に入りなおした変人で、だから年齢はあたしより四つだか五つだかオッサン。お互いに捻くれているせいか、癪だけど気が合う。
授業でＣＤジャケットのデザインが課題に出たとき、史朗は一晩で３０種類を製作してきたツワモノだ。
かたやあたしは販売店に出回る状態にまで仕上げなければ気に入らなくて――要するにケースに収めてキャラメル包装をし、販促ポスターと併せて提出した商品フェチである。
お互いに凝り性だったから、一緒にいると妙にしっくりきた。ライバルとして反発もしたし気に入らなかったけれど……実は友人以上、恋人未満の関係だった過去がある。

「お疲れさまですうっ」

ドリップしたての熱々コーヒーを手に、杳が仕事部屋のドアを開く。

「あまり根を詰めないでくださいね。あ、先生のぶんには胃を痛めないようにミルク、入れておきましたから」
「ありがと、杳」
「名嘉さんはお砂糖とミルク、使いますか？」
「いや、いらね」
「何か必要なものがあればいつでも呼んでくださいね」

電卓を叩きながらひとすすりすると、ちょっぴり甘い蜂蜜の味がした。杳が出て行くと同時に、史朗はまたもクックと笑う。

「なにあれ、メイド喫茶？　じゃなきゃペットか」

「そんなわけあるか。あたしの部下よ」

ついでに恋人なの。とは何故だろう、言いにくい。

「作業終わったら呑むか。遅ればせながら新年会」

「うん、焼き鳥ね焼き鳥」

「いいねえ」

誘いを断る習慣のないあたしは即答してからもすっかり忘れていた。コイツが女遊びの達人だってことと、昔、呑んだ夜は史朗の家に一泊していたことを。

当然、何もなかったとは言えない。

「うああ、終わったあ！　目が死ぬ」

「惟の分際でよくやった。褒めてつかわす」

「……殴られたいの」

「オンナに殴られるなら本望だね」

「悪趣味、最低、くたばれ」

「惟が俺の靴を舐めるなら喜んで死んでやろう」

「このド変態が」

なのに風貌はなかなか見られる男だとか、癪に障るったらない。

史朗の外見は職に似合わずズバリガテン系、とはいえ骨太すぎるわけでもなく、全体的な骨格はやや細身で、筋肉だけを上手に盛り付けたような姿形をしている。

学生時代には阿部寛に激似だったせいか、女子高生が出待ちをしていたりもした。合計何人食ったのか、見当もつかない。
まあ、阿部も史朗もあの頃よりずっと老けたわね。

「おし、行くか。まだやってるかな、学生会館の横の焼き鳥屋」
「あそこ？　なら角の炭火にしない？」
「なんだ、懐かしさより味をとるのか」
「当たり前でしょ。史朗と懐かしみたい過去なんてないし」

あたしは接待があるときと同様に、アシスタント部屋に事務所の鍵を置きに寄った。杳はいつも通り、気をつけて行って来てくださいね、なんて軽く送り出してくれて。だから実際に史朗がそれを言い出したとき、しまった、と血の気が引いたのだった。

「惟、ノーマン・ロックウェル、好きだったよな」
「ん、今も好きだし」

ロックウェルはローウィ同様あたしが敬愛する芸術家のひとりである。アーリーアメリカンのモダンな雰囲気はサバサバしていてどれも好きだ。擬人化したら相当気が合うだろう。

「こないだ買ったんだよ」
「何を」

あたしはビールジョッキを傾けながら問う。流石はキリンだ。ビールは冬でもキーンと冷えたやつに限る。

「直筆のイラスト」
「ぶっ、ウソッ！？」

吐き出した泡を顔面で受け止めて、史朗は「汚ェな」と眉をひそめた。

「……マジだっつうの。知り合いから八百万で譲って貰ったんだ」

「ちょ、それ真筆？」

ロックウェルのイラストが百万単位だなんて安過ぎる。それならあたしも欲しい。

「当たり前だ。鑑定済みだし」

史朗はクックと八重歯をのぞかせる。

コイツの事務所、なにげに儲かっていやがるな。腹立つわ。潰れちまえ。そう毒を吐こうとしたあたしに、彼はあざとい誘惑を投げてくる。

「見せてやろうか」

「マジ！？　見る見る！」

「よし、じゃあウチで飲み直そうぜ」

「……はっ？」

「寝ぼけた声出してんじゃねえよ。見るんだろ、ロックウェル」

しれっとした顔で立ち上がる彼を見上げ、硬直してしまった。

（マズい、嵌められた）

こういう男を世間ではテダレと言うのだ。付き合ってもいない男に下心丸見えで泊まりに来いよ、と言われてホイホイついて行く女はいない。史朗は絶対に言わない。泊まりに来いなんていう直接的なことは、一切。

ただ、部屋に上がり込まなければならない理由をポンと与えるだけ。
小狡いというかなんというか、女の扱いに長けている男が使う手口というのは大概こうなのだ。

「惟、ワインは赤だったよな。チーズでも買ってくか」
「いや、あのさ史朗」
「画集も買ったんだよ。ほら、学生の頃話してたやつ」

さりげなく会計まで済ませて、先に店を出てゆく馬面男を、あたしは追いかけることしかできなくなる。そういえば初めて史朗としたときもこんなだったな。
苦い思い出が蘇る。あの日も新しいプリンターを買ったとか言われて、あたしはＭＯを持って上がり込んで……うっかりやってしまったのだ。

「あたし、今日は帰るから」
「なんだ、ロックウェルには飽きた？」
「ち、違うけど」

ああもう、すっかり史朗のペースじゃない。

「もうああいう奔放な生活、やめたのよ」
「へえ、男でも出来た……ワケねえか。おまえを乗りこなせる騎手は俺くらいだぞ」
「ハア！？　バッカじゃないの！」

久々に会ったと言うのに調子よく口説くなと言いたい。むしろ殴りたい。

「見栄ェはってんじゃねえよ。見てェんだろ、直筆画」
それは見たい。見たいに決まっている。けれど。あたしは史朗の腕を掴んで無理矢理振り向かせる。
「す、……好きな男がいるの。だからアンタと仕事以上のことはできない！」
「飲みに来てるじゃねえか。ふたりきりで」
「……そ、れは」
言われてみればそのとおりで、あたしはコイツとふたりきりで飲みに行くと……杳に。
杳に、見送らせた。
さあっと血の気が引く。
「か、帰る、あたし」
「……惟？」
「ロックウェルは見たいけど、だけど、もっと」
もっと大事なのだ、杳の笑顔のほうが。
「おい！」
踵を返したあたしの腕を、今度は史朗が掴む。
「……つまらねェ女に成り下がってんじゃねえよ」
「放してよ、史朗には関係ないでしょ」
「そのへんの女と同じように、適当な男に飼い慣らされるな。おまえは、自由すぎるところがいいんだ」
「うるさい、あたしはアンタに好かれようだなんてハナから思っち

ゃいないわよ」

振り払おうとしても、出来ない。痛い。

「ロックウェル、あれは惟のために――」

「それ、僕も見せて頂いていいですか」

えっ？

史朗の太い声に重なって聞こえた、ハイトーンボイス。あたしは声の方角を振り返り、目を見張った。

「ロックウェルの真筆、先生だけ見られるなんて狡いですよう」

杳、どうしてここに。

驚くあたしの目の前で、彼はいつもの綿あめスマイルを披露する。

「僕、チーズなら美味しいお店、知ってますよ。そこの駅ナカにあるんですけど、良かったらご案内しましょうか」

なんだおまえ、と魂の抜けた顔でつぶやく史朗。あたしは隙をついてその手をふり払った。

「惟さんの朝食のオムレツには、そこのモッツァレラを入れるのが定番なんです。ね？」

「え、あ、うん」

野獣が眉をひそめる。「朝食……？」対し草食動物は怯む様子もなく、無邪気な動作で彼の腕を引いた。

「だから僕も連れてってくれませんか？」

わざと、だ。
直接的なことは一切口にはしないのに、さりげない牽制が伝わってくる。しかもその手口は史朗の誘い方をうまく逆手にとったようなもので、これ以上ないってくらいに効果的だった。
僕の惟さんに！なんて飛び掛かったところで、杳が史朗に敵うはずはない。ましてや口が上手い男のこと、絵を見せようとしただけだ、なんてかわされたら肩透かしもいいところだ。
けれどこんなふうに懐かれてしまっては――

「……あ、ああ、いいけど」

断るほうがおかしいもんね。

「やったあ！　ありがとうございます、名嘉さん」

それは、草食が肉食に勝利した瞬間だった。お見事としか言い様がない。
そんなことであたし達は共にロックウェルの真筆を拝み、苦い顔の史朗にお礼を言って、真夜中に帰宅したのだった。

マンションの階段、カツカツとヒールの音だけが響く。妙に静かだ。
なぜなら杳は珍しく無言で、あたしもなんだか喋りにくかったから。
やっぱり怒ってるのかな。嫌われたかな。不安でたまらなくて、部屋に入るなりその小さな背中に抱き付いた。
史朗に言わせればあたしは今完全につまらない女に成り下がっているのだろう。別にいい。それでも杳が欲しいから。

「……ごめん、杳。別の男とふたりきりで飲んだりして」
「単なる接待じゃないですか。謝らないでください」
杳はあたしの腕をぽんぽん叩く。
「僕のほうこそ、便利な男でいいって言ったくせに……すみません、でしゃばっちゃって」
向き合うと、妙に切ない瞳で見上げられて悲しくなってしまった。彼氏なんだ、と史郎にはっきり言ってしまえば良かった。どうして迷ったりしたのだろう。
「杳は便利な男なんかじゃないよ。もっと色々、あたしに言う権利、あるんだよ」
「色々、ですか」
「うん。他の男とふたりで会うなとかメアド交換するなとか」
仕事上、それが不可能だということは分かっていたけれど。でも、そんなわがままをひとつでも言って欲しいと思った。
「……じゃあ、ひとつだけ」
杳は背伸びをして、あたしの頬にキスをする。それだけで満たされていく気になる。
「いますぐ、僕のものになってもらえませんか」
なだれ込んだ寝室で、いつもより強く抱き寄せる腕が心地良かった。
ふわふわの髪の毛を指ですいて、くしゃくしゃにする。優しくて

柔らかい、癖になる抱き心地の草食動物。けれど。
可愛い外見に似合わず、野獣をも打ち負かす利口なケモノ。そう、小さくても立派なケモノだ。今は、とくに。

懐柔されているのは、彼か――あたしか。
とりあえずもう、以前の自分には戻れそうにない。

6．身に覚え、ないこともない

この世に生まれ落ちてもうすぐ三十年。
つまり認めたくないけれど三十路間近。

人間そのくらい生きると、昔とった杵柄とか若さゆえのやんちゃな武勇伝とか、ちょっとした過去のお土産を両手にぶら下げているものだ。身に覚えがあるかないかは別として。
いや、要するに今回はそんな、あたしの記憶からポッカリ抜け落ちていた手みやげ――過去の話なのだけれど。
それを思い出したのは、テレビで雪解けのニュースを目にした翌日のこと。白銀の絨毯からのぞくフキノトウの黄緑色は眩しいくらいのコントラストで、垂涎必至の極上映像だった。
アイツは天ぷらにすると絶品だ。あたしの舌はよく知っている。とはいえ自分が揚げた天ぷらなんて食べられたものじゃあない。
だって油を吸った小麦粉の塊なんだもの。そして毎回菜箸ばかりが旨そうにこんがり揚がるミステリー。
ということで本日遅番のあたしはメールで早速杏におねだりを実行、今日のランチは揚げたて天ぷら御膳だぞう、なんて浮かれながら出勤してみれば――――。

「ふうん。お前、料理上手いんだな」
「いえそんな、お褒め頂けるほどじゃ」
「いやいや、メチャクチャ旨いぞこの天ぷら」

よりによって事務所には史朗と言う名の虫がわいていた。
春だからとかいう理由なら、あたしは冬からすっとばして夏を迎えたって構わない。何故見たくもないコイツの顔を見ながら昼飯を

食わねばならないのか。美味しいはずの杳の手料理が台無しだ、誰かキンチョールを持って来い。

「さりげなくタダ飯くらってんじゃないわよ、用事が済んだらとっとと帰れ」

「杳くん、ごはんおかわり」

「あ、はい、いますぐ」

「無視か、つうか少しは遠慮したらどうなの。杳も杳でこんな野郎に顎で使われなくていいから」

どれだけツッコめばいいんだあたしは。

「邪険にすんなよ。俺はわざわざシンガポール土産をだな」

「どうせ通販のマーライオンチョコでしょ。いらん、そんなもんいらん、だからとっとと失せろ」

「先生ぇ、落ち着いてくださいよう。ごはんくらいいいじゃないですか」

「人が良すぎるのよ杳は！」

しまいには食後の煎茶まで提供しだしたものだから、脱力するしかなかった。

わかっているのだろうか杳は。そいつが恋敵なのだということを。もしや超がつくほどの平和主義なのだろうか。いやいや、いくら草食系とはいえ、それは寛容すぎるってものでしょ。

「お前さ、コイツのどこがいいわけ？」

史朗は煎茶をズズッとすすりながら、真面目な顔で問う――杳に。

「ちょっと待て、随分失礼な質問をしてくれるじゃないの」あたし

に。
「いや、だってさ、こんなにいい子なんだぞ杳くんは。悪いオンナに妙な手口でたぶらかされていることは誰の目にも明らかだ」
悪いオンナ、とはもしかしなくてもあたしのことだろう。杳は確かに良い子だけれど、それゆえに反論ができない。
そそくさとアシスタント部屋に帰っていく女の子達を横目で見送り、あたしは悔し紛れに舌打ちをした。
（ちっ、月のない晩は背後に気をつけなさいよ史朗。一撃でやってやる）
「えと、それは……僕が惟さんを好きになった理由、ってことでしょうか」
トレーを抱え突っ立ったまま答える杳が不憫すぎて、隣りに着席をうながす。史朗が当たり前のように煙草をくわえたから、灰皿を逆さにしてやった。
「ほら見ろ、こういう底意地の悪い性根の腐った年増女なんだぞ惟は」
史郎はさも得意げに言う。文句があるなら出ていけ、と追い出してしまいたかったけれど我慢した。杳が何といって史朗の問いに答えるのか、知りたかったからだ。
初めて会った時から好きだった、とかいう話ならさわりだけ聞いたけれど、よく考えてみれば詳しいことまでは知らない。
あの日、あたしは確か徹夜明けでノーメイク、クマもくっきりで見るも無残な姿だったし、一目ボレってことはひっくり返ったってありえないだろうし。

「自転車です」

少々うつむいて、赤面しながら杳は言った。

「惟さんが自転車の話、してくれて……僕、こんな人になりたいって思って……だから最初は、憧れだったんです」

自転車……？

首をかしげるあたしをちらと見て、杳は残念そうに口角をあげる。

「先生は覚えてないですよね、やっぱり」

こうして、彼の目から見たあたしの印象が初めて語られることになったのだった。

「初めて会った日……僕は入社三日目で、惟さんは締め切り明けでした」

ふんふんと興味深そうに頷く史郎。なんとも憎々しい馬ヅラだ。殴り倒したくてたまらないというのが本音だけれど、杳が喋り終わるまで片目をつぶって我慢してやることにした。

「競争率の高い業界ですし、ようやく内定がもらえた企業でしたから、僕、嬉しくて舞い上がっちゃって。早速失敗しちゃったんですよ」

杳は湯呑み茶碗を両手でふんわり包みながら、恥ずかしそうに言う。

「なんだか所在なくて。お昼休みも休憩室の隅で、ひとりでお弁当

を広げてて。そこに、惟さんがあらわれたんです」
「あたし？」
そうだったっけ。休憩室？　初対面は挨拶回りのときだったと思っていたけれど。
「はい。食べないのかって聞かれて食欲がないって答えたら、惟さん、じゃあちょうだいって」
「うわっ、初対面の後輩から弁当強奪かよ。この人でなし」
史郎は手を叩いてゴリラのように笑ってくれる。
くっそう、一撃でやるのはやめだ。じわじわなぶる方向で修正案を提出、採択されるのは時間の問題である。
しかし、あたしが杳のお弁当を、だなんて本気で記憶にない。
秘書がやりました、というのは政治家でなければと通用しない言い訳だろうか。
「惟さん、おいしいってパクパク食べてくれて。お茶も持ってきて欲しいって」
「今度はパシリか！　この外道！　あっはっはっは、くっくっくっく」
「気持ち悪い笑い方しないでくれる」
あたしは笑えない。自分で考えても酷い。そんな出会いのどこに恋に落ちる要素があったというのだろう。
すると杳は、ますます恥ずかしそうに座り直して言った。
「一息ついた頃、惟さん、言ったんです。仕事なんて自転車と同じなんだ、最初は漕ぎにくくて当然なんだ、って」

――――あ。
やっとのことで蘇った記憶。そうだ、そんなことを言った覚え、ある。
「始めからスイスイ走れる人なんていないし、漕ぎ出しにふらついて周囲に迷惑をかけちゃうのは当然のことなんだって。でも、いつかスピードに乗って進める時が来る、その風を切るような爽快感は、やり切った人間にしか感じられないんだよ、って――そう聞いたとき、僕、挫けていられないなって思って」
史郎がぴたりと動きを止め、感心したようにこちらを見る。恥ずかしくて逃げ出したくて居心地は最悪だった。
随分とエラそうなことをペラペラと演説したもんだ、あたし。
「だから、僕にとって惟さんは最初、人間として最高に尊敬出来るひとだったんです」
「真剣なんだな」
「はい」
「ま、惟に女としての魅力があるとは思えない話だったが、そこだけは承知した」
一言も二言も余計だ。はっきり言えばコイツの存在そのものが余計だ。すると杳はいつもの人懐っこい笑顔でさらっと答えたのだった。
「惟さんの魅力？　そんなの名嘉さんなら充分ご存知でしょ」
ちいさくてかわいらしい彼は相手に警戒心を抱かせないにもかか

わらず致死量の毒を持っていて、ゆえに時々タチが悪い。
史郎はふんと鼻を鳴らして立ち上がり、ばつが悪そうな顔をして去って行った。

テーブルの上のマーライオンチョコを口に詰め込み、あたしは作業部屋へと向かう。杳はトコトコ子犬みたいについてきて、さりげなくお茶を出してくれた。
なんとなく無言。
あんなこと言ったっけ、などと話をほじくり返すのも恥ずかしい。
察したのか、彼は頑張って下さいね、とだけ言い残してあたしをひとりにしてくれた。

「はあ」

青二才があんな講釈をぶっこいていたなんて恥以外の何モノでもない。穴がなくてもどこかにもぐってしまいたい。
しかし、仕事が自転車だというのなら、あたしの後ろには杳も同乗しているということになる。
今はまだヨロヨロしていて不安定な走行だけれど、いつか痺れるほどいい景色を見せてあげられたらいいな、なんて。
（ああやだ、恥ずかしい恥ずかしい）

「――おっし」

背筋を伸ばしてマウスを掴む。
さて今日もいっちょ、頑張りますか！

7．女の敵は

女の敵は、オンナである。
これはあたしの座右の銘。

奥沢華子（おくざわ かこ）に出会ったのは専門学校に入学したばかりの四月のことだった。
艶やかな赤茶色のロングヘアをキツめの外巻きにし、いつもミニスカでキメているフェロモンむんむんの華子を、あたしは『ジュリアナ』と呼んでいた。
もちろん心の中でだけだけれど。
友達でもなんでもない、単なる同級生だったからニックネームで呼ぶ機会なんてなかったし、あいつは怒らせたら臨月の牝ネコみたいになるから、いくら心安くても口にはできなかっただろう。

とにもかくにもあたしは華子が大嫌いで、あいつもあたしのことなんて大嫌いだったのだ。これだけは断言できる。

だって華子が好きだった男とあたしはいつも一緒にいて、いいライバルで、男女の関係でもあって、にもかかわらず恋人でもなんでもなかったのだから。
つまりアイツからしてみればあたしは、好いた男を振り回す悪女だったのだ。何度も作業中のＭａｃからデータを消されたし、嫌われていたことは間違いない。
で、何故今になって華子の話題に触れなければならないのかというと――今度の仕事、運が悪いことに――あいつと競わなければならなくなったから、なのだった。

「奥沢さんって食品会社のＣＩをデザインなさった方ですよね。こないだ『デザイナーズラボ』に載ってましたよ。てっきりグラフィック専門だと思ってました」
「この業界は地続きだからね。まさか製品分野であいつと競合する羽目になるなんて、あたしも予想外だったけど」

シクシク痛む不憫な胃袋に、ぬるいホットミルクを流し込む。これは今日の朝食だ。杳はお粥を炊いてくれると言ってくれたのだけれど丁重にお断りした。柔らかいものでさえ、今は消化できる自信がない。
華子との一騎打ちはいよいよ今日、某メーカーにて、プレゼンと言う名の戦があるのだ。
今回の契約はとれればかなり大きな儲けになるし名前だって売れる。つまり今後の仕事の命運をも握っているから失敗できない。

「惟さん、あの」

ふいに杳があたしの右手を握った。甲がじんわりと温まって、自分が冷えきっていたことに気付かされる。

「大丈夫です。僕もいっちゃんもついてますから」
「……うん、ありがと」

気遣ってくれる人が側にいるというのは、こんなに有難いことだったのかということをようやく実感した今日この頃。
あたしは、ここぞという時専用アーマー　――ＧＵＣＣＩのブラウスと黒パンツ、ルブタンの赤いパンプスを装着し、事務所を経由しながら子分を引き連れて戦場つまり取引先へと出陣したのだった。

＊　＊　＊

「――――ターゲットは主に、二十代から三十代のペットと暮らしている独身女性です。コンセプトは『スペシャル』、何より特別な存在であるペットと過ごす休日を、とびきり贅沢な時間にするために、お揃いのテーブルウエアをヨーロピアン調で一式デザイン致しました。素材はペット用も同様にボーンチャイナ、質、手触りともに高級感を追求した仕上がりを目指します」

敵ながらあっぱれな饒舌だ。華子は見た目もお水だけれど、喋り方も流暢で客商売のほうがよっぽど向いていると思う。デザイナーなんてやめちまえばいいのに、そう心の中で毒づく。

彼女がペラペラ喋ると同時にアシスタントがパネルを提示するのだけれど、これもまた見事というか絶妙のタイミングで、あたしは卑しくも失敗を祈る。

噛め、かんでしまえ。

「すごいですね、流石です奥沢さん。勉強になります」

目をさかんに開閉させながら、杳はその様を一心不乱に見つめている。圧倒されているみたいだ。これだけ本格的なプレゼン合戦に参加するのは久々だから無理もないか。あたしは声をひそめ、彼といっちゃんに耳打ちをした。

「ここからよ、本当に凄いのは」

華子は侮れない。そうあたしが思うのは、なにもセンスがいいからとかいうわけじゃあない。

「手元にお配りした資料をご覧下さい。購買層にあたる女性１０００人に行ったアンケートの結果です。さらにそのなかから三名の抽

出を行い、生活レベルや給料に占めるペット関連消費の割合を――――」

千人！？、といっちゃんが眉をひそめる。これだ。奥沢華子が業界で一目置かれている理由は。

彼女の仕事は緻密なデータと綿密な計算に裏付けされている。要するにリサーチ能力がずば抜けて高いのだ。

とはいえ雑貨の分野なんて、どんなものがどれだけ売れるかなんて蓋を開けてみなければ分からない。絶対に売れる！と思ったものが全く売れなかったり、これはいまいちだ、と生産個数を少なく設定したものがベストセラーになったりもする。

だから正直、生産時には全く予想もつかない状態で、リサーチなんて実際役に立たないことが多いのだけれど――しかし、最終的に商品を製造するか否かは取引先のお偉いさん方が決めるわけで、その人達を納得させる材料を多く持っているほうが当然有利なのだ。

（うう、ちくしょう、やりやがるな）

心の中でさかんに舌打ちをした。

とは言え、タダで負けてやるつもりはない。あっちがその手で来ることは重々承知なのだ。

交代して壇上に立ったあたしは、その場で自分のバッグをごそごそ探った。

「皆様はこれが何なのか、もうご存知だと思います」

小さく丸めてあったそれを引っ張りだすと、広げて常務の胸元にあてる。

「よだれかけ？　じゃないですよ、もちろん」

どっと会議室が揺れる。つかみはオッケー、いい滑り出しだ。
ここの会社の代表はみんな海外育ちなのだ。だからプレゼンも欧米風のずばっと物申すスタイルでやらせてもらう。これがあたしの、この度の作戦なのだった。

「これはエコバック、エコ商品の代表格ですね。今や複数個所有している消費者も多いとか。近年エコカー減税や家電に対するエコポイント等も実施されましたし、エコへの関心は国家レベルで高まっていると言えるでしょう」

お偉方がばらばらと興味深そうに頷いてくれた。

「時代はエコです。エコ商戦に乗り遅れてはいけない――、そう思っていらっしゃるのは、なにも皆様だけではありません」

あたしはさりげなく合図を出す。応えて、杳が部屋の後ろで大きなパネルを持ち上げた。
彼の姿はパネルですっぽり隠れてしまっているけれど、きっと緊張のあまり妙な表情になっているだろうと思う。想像すると可愛すぎて笑いがこらえきれない。ついつい口元が緩んでしまったあたしは、余裕の笑みとばかりにそれを誤摩化した。

「あちらをご覧下さい。販売店のうち、エコに対し何らかの取り組みを行っていると答えた店舗数の推移です。数年前から急激に伸び、今後も拡大が見込まれます。中には、ビオトープや植林などの取り組みに参加している企業もありました」

自然と戯れる子供たちの写真がグラフをとりまいている。どれもこれも、いい笑顔ばかりだ。実を言うと、これを撮ったのは杳。以

前写真部にいたとかで、現像まで自分でこなすし、あまりにも本格的でちょっと驚いてしまった。
ファインダーを覗く目は真剣そのもので、惚れ惚れするほど格好良かったし。

「店頭で直接うかがったところ、エコを全面に打ち出したい、コーナーを別に作って売りたい、ともおっしゃっていました。要するにエコ商品は販売店のイメージアップにも繋がるのです。どうでしょう、販売店が喉から手を出しちゃうような商品を作る――　ええ、もちろん実際に出ちゃったら大変なことになりますが――」

会議室はまたもや笑いに包まれる。いいぞ惟、頑張れ惟、独り身が長かったから、自己応援は得意技だ。

「今や一人勝ちは時代遅れ。Ｗｉｎ－Ｗｉｎの関係で商品を造り売っていけたら、それこそ、無駄を排除するエコへの取り組みとも通じ、良い効果を生み出すのではないでしょうか」

合図を出すと、家庭の電子レンジで使えるエコな調理器具のかみしばいをいっちゃんが演じてくれた。全体的に出来は上々、といったところだろうか。

「では、結果は一週間後に担当者からお知らせ致しますので」

担当の篠崎部長がそう言って締める。これにてプレゼン合戦は一件落着――――と思ったら。

「どうですか、このあと飲みにでも」

高橋常務があたしと華子を呼び止めた。細身の長身でちょいワル

そのものの彼は手が早いことで有名だ。
なんとなく嫌な予感はしたし、正直、華子が一緒だなんて酒が不味くなるから遠慮したかったのだけれど、当然断れる立場じゃあない。

「ええ、いいですね。ぜひ」

にっこり笑って、心の中のサンドバッグをめった打ちにするしかなかった。
最悪だ。本当なら、事務所に戻って打ち上げをしようと思ってたのに。

＊　＊　＊

足を踏み入れたるは巷で評判の隠れ屋的バーだった。
バーテンダーは皆、ショーケースに並べた宝石と見紛うほどの粒より美青年だ。
デートには使えないな、と頭の隅で思う。女連れでこんなところに来れるのは対抗馬として相応しい美形か、或いはそうでないけれどそうだという自信を持った勘違い野郎だ。
そしてあたしは現在、後者と酒を酌み交わしている。

「今日のプレゼンは良かったなあ、はっはっは。やはりフレキシブルな考えが欲しいんだよね我が社としてもね。ライフサイクルアセスメントについては僕も重用だと思っていてね」

うざい。
現在の状況をツイッターに書き込むとしたらこの三文字だとか、あたしはどれだけ悲しい社会人だ。どなたか同情していただきたい。
返答をごまかすようにスプモーニを飲み干して、さりげなくおか

わりをオーダーする。
年配男性にはよくいるのだ。とりあえずカタカナ語を連発していれば知的に見えると思っている人が。
彼らは気付いていないのだろう。格好というのは化粧と同じで、重ねれば重ねるほど崩れるものなのだということを。
個人的には、寒い親父ギャグを連発されるほうがまだマシだと思う。
あたしが返答しないでいると、華子がすかさず「そうですね」と言って会話を広げてくれた。話しが通じると思ったのか、高橋常務は笑顔で振り向く。
思わず笑いを噛み殺した。馬鹿ねえ、華子。こういう男には真面目に受け答えすると調子に乗って取り留めもなくなるのよ。
予想通り演説しまくる彼の向こう側、不快そうな笑みを浮かべた華子の顔が垣間見えた。

（ま、もう関係ないも同然か。ありがと華子。あたし今、人生において初めてアンタに感謝した。メルシ）

その後、調子良くカクテルグラスを空けるあたしを、杏は心配そうに見守っていた。いっちゃんはパネルを抱えて事務所に戻ったのだけれど、彼はあたしのお供ということでここまでついてきてくれたのだ。

「ゆ――先生、飲みすぎですよっ」

見ていられなくなったのだろう。七杯をこえたところでストップがかかった。

「えー、まだ足りない」
「帰れなくなりますよ」

声をひそめて言いながら、カウンターの下で手を握ってくる。照れ隠しに頬杖をついてアンニュイな表情を作りつつも、心の中でほくそ笑んでしまった。
杳とふたりきりならもっと美味しいお酒が飲めたと思うけど、そうしたらこのドキドキは味わえなかったわね。
こっそり手を繋ぐ、なんて。

「よーう、今日、どこか泊まってく？」
「ちょ、惟さん、聞こえちゃいますからっ」
「ふふ。動揺した顔もかわいっ」

すっかり上機嫌になったあたしの前に、新しいカクテルグラスが置かれる。淡いピンクの液体表面に、深紅の薔薇の花びらが浮かんでいてこの上なくエレガントなたたずまいだ。ふうっと息を吹き掛けると、それはゆらゆらと小舟のように優雅に揺れた。
担当のバーテンくんは杳と同じ歳くらいに見える。いかにも今時らしい、癖っ毛風のヘアスタイルで、切れ長の目元がなかなかに麗しい。杳もこんな髪型にしてみたら似合うんじゃないだろうか、なんて想像してからはっとした。
やだ、あたしの思考、最近すぐ杳に繋がる。
そんなくすぐったい感情に酔いながら、手の握り方をちょっと変えて、指先を絡めたときだった。

「ちょっ……やめていただけません！？」

華子がキレたのは。

「黙っていれば調子に乗って……太ももに手を乗せるのは立派なセクハラでしょう！」

甲高い声は静かな店内に響き渡り、一気に他のお客さんの注目を集める。眉を吊り上げた華子の姿はさながら威嚇するメス猫で、噂に違わぬ激昂ぶりだった。とはいえ息巻く彼女を前に、高橋常務も負けてはいない。

「な、なんだ君は――そっちから誘ったんだろ！」
「なんですって、冗談じゃない。誘うにしたって相手くらいきちんと選びます」
「ど、どういう意味だ、失礼じゃないか」
「本当に失礼なのはどちらか、冷静にお考えになったらいかがです！」

まさしく互いに一歩も譲らぬ攻防戦ってやつだ。杳はアワアワと唇を開閉させてうろたえている。
面白い。面白いけど、拙いなと思った。
大人としてはこの状況、放置して逃亡するわけにもいかないし、かといって黙って眺めているわけにもいかない。

「あのー、おふたりとも、とりあえず落ちつ……」

愛想笑いでそう言ったときだった。彼が、あたしの地雷を真上から景気よく踏み付けてくれたのは。

「女のくせに……こんなことをして、あとでどうなるのか分かってるんだろうな！？」

（あんだって？）

あたしの眉がピクリとはねあがったことに、彼は気付いていただろうか。いや、そんなはずはない。
だとしたら、次の一言は口にしなかっただろうから。
「おとなしくしていれば有利に取引してやろうと思ってたのに」
例えばそれが負け惜しみの嘘や捨て台詞だったとして、本心は全く別のところにあったとしても、言って許されることと許されないことがある。
女は男に従えと？　組織が小さいなら媚びへつらえと？　どれだけ古風な価値観だ。労働者をなんだと思っていやがるんだ。蟹工船でも読んで出直せ。
「――あら失礼」
あたしは目の前のカクテルグラスにわざと指を引っかける。
かしゃん、小さな音を立ててそれは倒れ、カウンターの上に中身をぶちまけた。勿体ないけれど仕方がない。
液体は高橋さんのお高いスーツ（多分イタリアのなんたらのオーダーメイド）へと一直線に流れる。彼は短い悲鳴を上げて、すばやく席から飛び退いた。
（こういうときにわかるよね、男の度量の大きさって）
すると先程の可愛い顔をしたバーテンダーがタオルを持ってカウンターから飛び出してくるのが見えた。はやく、と言わんばかりに常務はそちらに手を伸ばす。
あたしはその隙に立ち上がり、華子の腕を引いた。「ちょっと黙ってなさいよ」こっそり耳打ちをしながら。
「すみません、せっかくの素敵なスーツが……これ、クリーニング代です」

カウンターの上に諭吉をふたり重ねて置く。本当なら事務所で打ち上げをするときに使おうと思っていたお金だけれど、致し方ない。
常務はというと、濡れてもいないスーツをタオルで賢明に叩きながら「え、ああ」。妙に慣れた仕草だ。

「ついでにこちらの会計も済ませておきますね。美味しくて呑み過ぎたら酔ってしまって……今日のところはこの辺で失礼いたします」
「え」
「では」

相手に口を挟ませない勢いで喋りきり、深々とおじぎをするとあたしは踵を返した。
カードで支払いを済ませ、ふたりの腕を引いて店を出る。
外はネオンの洪水だった。来た時とは景色がまるっきり違う。こんなとき、ふと、地下世界に迷い込んでしまったような気分になるのはあたしだけ？
夜風が喉元から滑り込んできて、ブラウスがあっという間に冷たくなる。まだまだ、春とは言え日が暮れると寒さが戻ってくるみたいだ。思わず肩をすくめ、駅への道を百メートルほど足早に進んだ。

「小野原さん」

魂の抜けたような声で華子があたしを呼ぶ。

「……ありがとう、おのは」
「あーやめてそういうの。あたしだってアンタが被害に遭ってるの、放っといたわけだから。あと名字もナシ。なんか気持ち悪い」
「気持ち……、言ってくれるじゃない」
「さっきのアンタほどじゃないわよ。ま、すっきりしたけどね。あ

たしだって杳がいなかったら『女ナメんな！』ってタンカきってた自信があるわよ」
「ようって？　もしかしてその子」
「うん、実はあたしのオトコなのよね。部下でもあるけど付き合ってるの。可愛いでしょ」

あたしが言うと杳は照れながらぺこっと頭を下げた。さながら、躾の良い小型犬だ。

「あ、あの、はじめまして。奥沢さんの仕事、いつも雑誌で拝見してます」

何か文句でもつけられるかと思いきや、華子は彼をまじまじと見つめ、うらやましい、と言った。
意外な一言だった。
だってあたしは在学中、彼女がもっとヒステリックで嫌味な女だと思っていたからだ。こんなに素直な性格だったなんて予想外もいいところ。
いや、素直だからこそ、妬いていじけることもなく、ストレートに嫌がらせをしてくれたのか。
お陰でデータを作り直す速度が上がった、とでも思ってやるわよ。

「しあわせそうね。いつまでも昔を引きずってるあたしとは違うわ」
「昔……って、やだ、華子まさか」
「ええそのまさかよ。この仕事だって、あんたと競うから引き受けたのよ。最近また、名嘉くんが惟とつるんでるって噂できいてたし」

えっ、と杳が口元を押さえた。あたしだって目をむいて驚いていた。まさか、華子がまだ史郎を思い続けていたなんて――そう、華子の想い人というのは何を隠そう名嘉史郎その人なのだ。

「本当はもっとコテンパンにやっつけて、後ろ足で砂でもかけてやろうと思ってたの。それがこのザマだもの、いい気味よね」

自分を嘲るように笑って、華子はガードレールの端に腰掛けた。

「あたし、アンタのこと嫌いだったわ。ついさっきまで」

居酒屋が並ぶ高架下、シミだらけのコンクリートをオレンジ色の街灯が照らしている。そんな光景を三人で眺めているということが不思議で、少し、……すこし、笑えた。

「あたしもよ。気が合うわね」

何のことはない。多分あたしたちは似ていたのだ。

あの頃にそれを知っていたら、どんな学生生活を送っていただろう。女同士でつるむなんてあまり得意ではなかったから具体的な想像まではできないけど、きっと面白い毎日だったと思う。

こんなふうに思えるのは、それだけあたしが歳を食ったからだろうか。

「今度は女同士で飲まない？」

名刺を引っ張り出して、携帯番号を殴り書きする。ついでに史郎の番号もちいさくメモしておいた。余計なお世話かもしれないけど、あの男もそろそろ身を固めたほうがいいと思うのよね。

差し出すと、それをにっこり受け取った華子は人混みの中へ消えていった。

カツカツと、小気味良いハイヒールの音を響かせながら。

＊　＊　＊

「カッコ良かったです」

ボチボチ歩き出した駅への道すがら、杳はそう言ってあたしの手を握った。あったかくて、やさしい掌。

こんなに些細な行為でも充分幸せな気分になれること、あたしは杳から教わった。

「プレゼンも、さっきのことも、やっぱり惟さんは最高に格好良くて、……惚れ直しました」

「ふふー、ありがと」

見下ろすと、杳は困ったように眉をハの字にしてぽつりと言った。

「なんだか誘いにくくなっちゃいましたよ」

「んー、どこへ？」

「僕の部屋」

あたしは目をぱちくりさせて立ち止まる。一歩先で振り返った杳は、進行方向とは真逆を指差した。

「ここの近くなんです、僕のうち。だから、泊まっていきませんかっていうつもりだっ「行く！」

即答だ。迷う必要なんてない。なのに杳は困り顔で後退し、駅へ向かおうとする。

「だめですよう。惟さんのマンションより狭いし、古いし、格好悪いですもん」

「体裁を気にする間柄じゃないでしょ」
繋いだ手をお互い逆方向に引っ張って、ちょっとした綱引き大会がはじまる。
「でもでも、あんなとこ、きっと失望させちゃいますっ」
「そんなの今更でしょうよ。あたしなんてノーメイク晒してるんだからね」
「惟さんはすっぴんでも充分きれいじゃないですか！」
「どこがよ、フォローならいらないわよ。お肌はもう二十五歳をピークに下降線を辿ってんのよ」
わいのわいの言いながら引っ張り合いをしているあたしたちの横を、迷惑そうに若いＯＬさんが通り過ぎる。思わずぴたっと黙り込み、数秒あとに揃って吹き出してしまった。
やだもう、なにこれ。高校生じゃないんだから。
ひとしきり笑って、呼吸を整えて、それからあたしは杳の耳元にこそっと囁いた。
例えばプレゼンの続きのように、とびっきり効果的な声色で。
「好きな人の部屋だから見たいの。……ダメ？」
予想通り真っ赤になった杳は、何事かを呟いて目線を泳がせつつ、進む方向を変える。
「……惟さん、卑怯です」
「なにが」

「きれいでカッコ良くてしっかりしてて……なのに時々、可愛いなんて……」

その手に引かれ、あたしは来た道を引き返し始める。
ネオンに擬態するように、丸い月がビルの間でさりげなく輝いていた。

＊　＊　＊

『てめえこのやろう、奥沢に俺の連絡先教えやがったな』

史郎が歯ぎしりをしながら悔し紛れに電話をかけてきたのは、一週間後のこと。

『あの女押し掛けてきたきり帰りやがらねえ。何とかしろ、この性悪女』
「あらー、でもアンタのことだから据え膳はキッチリ頂いちゃったんでしょ？」
『うっ……』
「案外良かったとか？　そうね、華子ったらアンタ好みの巨乳だしねー」
『……』
「図星ってわけ。それなら責任は取らなきゃねえ。そろそろ肚を括りなさいよ、史郎」

大笑いしそうになるのをこらえて、ワークチェアを転がす。
（ええと、あれどこへやったっけ。あれあれ。お、あった）
取り出したるは例のプレゼンをした企業との、正式な契約書。ハンコを押して送り返さなければ。

『おまえな、簡単に言うが』
「やーね、確信もっていってんのよ。ふたりは絶対に気が合うって。付き合っちゃいなさいよ」

どんな根拠でそんな、と困惑気味の声で言う史郎に、あたしは自信満々で答える。

「あたしと史郎が似た者同士だから」
『なんだそれ……』
「だって、あたしは華子と気が合うもの。アンタだってきっと同じよ」

大切なおしらせ

◆９／１７追記：書籍タイトルは『恋するデザイン』、レーベルはエタニティの赤になります。ご注意下さい。

◆８／２１追記：８話以降を削除させていただきました。

◆現在『Ｐｅｅｗｅｅ～年下草食甘男子～』の書籍化のお話が、出版社アルファポリスさまとの間で進んでおりますことを報告させていただきます。

正式に決定した場合、８／２１日２３：００をもちまして『Ｐｅｅｗｅｅ～年下草食甘男子～』はサイトから引き下げとなります。

女性だけでなく、男性にもお手に取って頂けたら……と、個人的には考えております。

作業に伴い、ご不便をおかけすることになると思いますが、ご理解いただければ幸いです。

また、詳細については随時お伝えいたします。

みなさまには今後ともかわらぬご指導のほどを、よろしくお願い申し上げます。

斉河燈

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0029k/

Peewee　年下草食甘男子

2011年9月23日11時03分発行